第11課　キリストによる自由

【暗唱聖句】

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい」ガラテヤ5:13

【今週のテーマ】

今週はパウロが語る自由とはどのようなものなのか、自由と律法とはどのような関係にあるのかについて学びます。

【日曜日・キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった】

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません」ガラテヤ5:1

パウロはキリストがわたしたちを自由の身にしてくださったのだから、二度と奴隷のくびきにつながれてはなりませんと、強い調子で述べています。そしてしっかりしなさいと励ましています。私たちは律法や律法による裁きや罪や死から、キリストのゆえに、贖われ自由にされたのです。それは、律法や死がもはや存在しなくなった、という意味ではなく、それらがまるで存在しないかのように無力になっているということです。律法が私たちを罪へと引きずっていくこともなければ、死が私たちを困惑させることもありません。信仰が私たちを義や永遠の命へと導いていくからです。このことをしっかりと確信し、恐れることなく、雄々しくあれと言うわけです。なぜなら、このことを疑わせようと悪魔は働いているからです。勝利の力はイエス様に対する信仰のみです。信仰が強まれば強まるほどに、自由の喜びは深まり、奴隷のくびきは消えていきます。わたしたちは不信仰に陥って、二度と律法を守る自分の努力で救われようとする、まるで奴隷のくびきのような状態に戻ってはなりません。それではキリストがわたしたちのために成し遂げてくださったことが無意味になってしまいます。

【月曜日・クリスチャンの自由の性質】

パウロは誰よりも多く聖書の中で自由という言葉を使っています。それだけ大切なものとして、パウロ自身が実感していたのでしょう。パウロが言うところの自由とは、キリストとの関係において生まれるものです。ここが世の中の自由と根本的に異なる点です。

自由についてのたとえ話

「あるところに美しいお城があって、そこにはありとあらゆる美味しい食物、良い衣服が一杯あり、それを使い放題使うことができます。そこにはつまり、自由があります。もし、そこに一人で住むことになったらどうでしょうか。自由を感じるでしょうか。いくら好き放題勝手にやっていても、二､三日たつと牢獄のように感じられのではないでしょうか。またそこに自分の言うことを絶対的に聞いてくれる召使い、奴隷がいたとしたらどうでしょう。自分のことを絶えず恐れ、ただ自分に仕える奴隷がいても少しも自分が自由だとは感じられないことでしょう。しかし、そこに自分のことを愛し、理解してくれる人がいたら、そして自分のほうでもその人を愛することができる人がいたらどうでしょう。その時に始めて自由を感じるのではないでしょうか。たとえそこに美味しい食物や美しい衣服がなくても、この愛する人と生活をするときに、自由を感じるのではないでしょうか。」

自由とは孤立的に得られるものではなく、他者との共鳴的、調和的な生活によってこそ得られるものです。自分の好き放題ができることが自由ではありません。そんな生活をしていたら、結局は自分のわがままさに振り回され、自分の欲望に振り回され、やがて自分の罪の奴隷になるだけであります。つまり自由とは何よりも自分中心の生き方から解放されることであることがわかります。律法主義ということの問題点に関しても、それは結局は自分のわざを頼りにするということで、自分を絶対化して、自分中心になるということであります。神様よりも自分を頼りにする生活となります。わたしたちクリスチャンの自由とはイエス様との関係においての自由です。これは霊的です。キリストとの正しい関係が築かれてはじめて、罪からも、永遠の死からも、悪魔からも自由になれるのです。

【火曜日・律法主義の危険な影響】

パウロはクリスチャンの自由を語るにあたって、ガラテヤ5章では「ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します」（ガラテヤ5:2）と強い調子で語っています。パウロがいかに律法主義に陥ることの危険を伝えたいと思っているのかが伝わってきます。パウロは割礼について語ります。

「もし救われるために割礼を受けなければならないのなら、キリストは何の役にも立たない方となるだけでなく、その人は他の律法もすべてを行う義務がある」とパウロは警告します。律法を人間の救いに関して考えるなら、全部かゼロ（キリストが全部を成し遂げてくださった）のどちらかしかないのです。また、「律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います」（ガラテヤ5:4）と続けます。おそらく多くの律法主義者たちは、神様のことを、イエス様のことを思って律法を守るのだと主張することでしょう。ところが、聖書は全く逆で律法を救われるために守ろうとすればするほど、キリストを不要なものとし、キリストから離されていくのだと語っているのです。

さらに、律法主義に陥ると、霊的な成長の妨げにもなります。パウロはガラテヤの人々に、「あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか」（ガラテヤ5:7）と言います。この言葉は霊的成長の道が妨げられているのだということです。

最後に興味深いのは、パウロは律法にこだわることによって、「十字架のつまずきをなくした」とも言っていることです。結局のところ、十字架がその人には関係のないものになっていくので、意識することもなくなり、結果的につまずくこともなくなるというわけです。

【水曜日・放縦ではなく自由】

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい」ガラテヤ5:13

パウロの強調点が変わります。これまで神学的な面を強調していましたが、ここでは倫理的な面について語っています。まず、私たちが主によって召しだされたのは自由を得るためだったと言います。召し出されたとは救われたと言い換えることができるでしょう。つまり、わたしたちが救われたのは自由を得るためだったということです。クリスチャンとして救われたのに、もし不自由さを感じているならば、救われたものとして生きてはいないということです。

しかしながら、ここでパウロはでは、救われたものが手にした自由とは何かという問題に目を向けさせます。反論者は言うことでしょう。ではクリスチャンは罪を犯しても構わないのかと。これに対するパウロの答えは、「自由を肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい」でした。違和感のある表現かもしれませんが、自由が与えられているということは、罪を犯す自由もあるということです。しかし、そのような発想は本当に神様を信じ、愛する人たちの中からは生まれてきません。それは悪魔に属する思いだからです。キリスト者の自由とはイエス様との関係において自由であることは前回学んだとおりです。むしろ、パウロは与えられた自由を愛によって互いに使えあうことによって使いなさいと進めています。

ミャンマー民主活動家として有名なアウンサンスーチーさんは、「あなたの自由を、自由を持っていない人たちのために使って下さい」と言いました。自由を与えられた私たちは、その自由をどう使うかを神様は見ておられます。

【木曜日・律法全体を全うする】

「律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです」ガラテヤ5:14

割礼を行うことが、さも律法を行っているかのように、個々の形にとらわれがちな人々に対して、パウロはわざとそれならば律法全体を行う義務があると言いました。理屈の上で、その通りですから、人々は反論することができなかったことでしょう。しかし、パウロはまた「律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです」とも言いました。個々の形にとらわれるとき、律法全体を守ることなどできませんが、しかし、隣人を愛することによって律法全体が全うされるというとき、律法の本質が見えてきます。

このとき、どれくらい愛するのか、どのように愛するのかとか、愛を数値化させようとしたりすれば律法主義に逆戻りです。律法学者たちは隣人とは誰なのかとイエス様に問いましたが、これも同様です。愛は計算づくで行うものではなく、必要に迫れて、気が付けば愛の行為があふれていたとでもいうべき事柄です。そのことが律法全体を全うするとするならば、律法を守るということそのものも、数値化したり、計算したりできるものではないことがわかります。わたしたちはイエス様との愛の関係に根差し、信仰によって自然に湧き上がってくる思いによって、律法を行っていく、いや気が付いてみれば行っていたというように、それはあまりにも自然なことなのです。